

翻訳絵本の読者反応に影響する要因

—戦争絵本『ひろしまのピカ』の日米比較研究—

足立 幸子

1. はじめに

幼い子どもたちにとって、絵本は最も身近な読書対象である。グローバル化した社会を反映して、外国で出版された絵本を翻訳絵本として読む機会が多い。これからの時代は、子どもの本が翻訳されて別の国や地域で読まれるとはどのようなことなのかを、守屋慶子（1994）の研究にもあるように、国際的に研究してみる必要があると考える。すなわち、翻訳絵本を読む際にどのような要因が影響するのか、その社会的な文脈も含めて研究したい。子どもの本や読むことの教育の国際的な研究も行われるようになってきた。海外での読書に関する理論が日本での読むことの指導に生かされたり（イーザー、1982；上谷、1997；ビーチ、1998；田中ほか、2012など）、反対に日本の読むことの教育が海外の教育に生かされたり（Osada, 2018）するようになってきている。

三宅興子（2019）はイギリスの絵本の研究者であるが、イギリスに招かれて講演を行い、日本の絵本がイギリスではどのように翻訳されているか、多数の日本の絵本を取り上げて検討を行っている。「絵本の翻訳には、言葉や表現の違いの奥にある文化や宗教の違い、精神性や生活観の違いなど大きな問題がつきまといまいます」(p.173)として『おふろだ、おふろだ!』による入浴習慣の違いや、『100万回生きたねこ』の宗教観などについて言及している。本研究はこれを先行研究と考え、さらに具体的な絵本に基づいて考察を加えるものである。そのため、本研究では、戦争絵本を研究対象とする。なぜなら、戦争は国や立場によるとらえ方の違いが現われやすく、社会的実践として翻訳絵本を読むことの意味や、翻訳絵本が子どもに読まれるまでの過程をより鮮明に反映してくれると考えるからである。本稿では、戦争絵本の一例として『ひろしまのピカ』に焦点を当てた2つの研究について述べる。この絵本は、夫である丸木位里とともに「原爆の図」に取り組んだ丸木俊によって書かれた原爆についての絵本で、1980年に小峰書店より出版されたものである。鳥越信（2002）は、日本の絵本の歴史において1980年代が「戦争や公害など社会問題が絵本になる」時期だとし、そのうちの1冊として『ひろしまのピカ』を取り上げている。「絵本という形態でビジュアルに惨状が描かれることへの疑問は、子どもたちへの手渡し方をふくめて賛否さまざまあるが、絵を見る年齢であれば、直観的に伝わって真実味がある」(p.198)とも述べている。そして本稿は、これが翻訳絵本として外国にわたった場合にどのような意味があるのかを問おうとするものである。『ひろしまのピカ』は日本では現在までに約60万部を売り上げており（日本版と略記する）、その翻訳は15か国にわたっている。アメリカでは、

原爆に関する絵本が読まれることは少ない (Apol et al, 2002) が、それでも『ひろしまのピカ』は、アメリカにおいても流通している。アメリカの翻訳絵本は、New York の Lothrop, Lee & Shepard 社から 1982 年に出版されている (アメリカ版と略記する)。なお、翻訳者の名前は明示されていない。さらに、同じ言語 (英語) の翻訳絵本として、イギリスの翻訳絵本を参照する (イギリス版と略記する)。イギリス版は翻訳者が Judith Elkin で、同じ 1982 年に Adams and Charles Black 社から出版されている。

研究の方法としては、絵本であることを重視し、文 (テキスト) と絵 (ビジュアル) の批判的分析を行う。なぜなら、翻訳絵本は文 (テキスト) と絵 (ビジュアル) から成立しているからである。研究 I では、批判的ディスコース分析を行う。批判的ディスコース分析とは、社会的実践の中でのディスコース (談話、ここではテキストの意味) に焦点をあてたディスコース分析の一種であり、欧米のリテラシー研究に広く用いられている (Fairclough, 1995; Gee, 2000; Goldman & Wiley, 2011)。日本においても、これらの手法を子どもの教育の文脈で用いようとする提案は行われており (小柳, 2003; 糠屋, 2011)、その際には分析者の主体ということが重要である (中西, 2008)。本研究の分析者は、背景の異なる日米の 3 名の研究者—すなわち、日本語母語話者であり日本の教育を受けてきた筆者と、日本語母語話者であるがアメリカで教育を受けてきた研究者である Junko Yokota 氏、英語母語話者でありアメリカで教育を受けてきた研究者である William Teale 氏—による分析を統合して論じる。研究 II は、日本とアメリカの小学校教師による絵の分析である。同じ絵であっても、社会的背景や既有知識が異なれば絵の見方は異なってくる。そこで、本研究では小学校教師に研究協力者となって絵の分析をしてもらうように依頼した。小学校教師であることには、3 点の理由がある。1 点目は、教師は大人であり、自分がどのように読んだか自覚的に説明できるからである。2 点目は、小学校教師は子どもの身近なところにおり、このような戦争に関する絵本に子どもが会う時に、その文脈を作り出す立場にいるからである。3 点目は、教師はこの絵本を読む意義や、このような研究を行う意義を理解し、自分が受けてきた教育や、自分が行おうとしている教育について述べることができるからである。『ひろしまのピカ』のような戦争絵本は、子どもたちは何らかの教育的意図や文脈の中で会うことが多く、その教育的意図や文脈を語ることも教師である。以上のことから、3 名の研究者による文の批判的分析を研究 I、日米の 25 名の教師による絵の批判的分析を研究 II とし、それらから、『ひろしまのピカ』が日本とアメリカで読まれる時には、どのような要因が子どもの読者反応に影響するかを探っていくことにする。

2. 研究 I テキスト分析 (文章の分析)

2.1. 研究方法

研究 I でとる研究方法は、前述のとおり批判的ディスコース分析である。分析の方法は、見開き 2 ページずつ、日本版、アメリカ版、イギリス版のテキストを読み、そのテキストから何が読み取れるか、読み取ったことに違いはないかを分析し、考えたことを付箋として書き留めて貼り、

その上でその考えたことを英語で話し合うという形をとった。日本語と英語が読める筆者と Yokota 氏は、英語に翻訳される時の単語を確認したり、その単語から受ける印象を述べたりし、日本語が読めない Teale 氏はアメリカ版とイギリス版を比較した上で、筆者と Yokota 氏の見解について意見を述べるという形になった。以上の批判的ディスコース分析のための絵本の読み及び付箋に基づく話し合いは、2006年11月に筆者が Yokota 氏・Teale 氏の自宅に滞在した際に複数日にわたって行われた。

2.2. 結果

ここでは、話し合いの中から特に比較研究上重要だと考えられる部分を4箇所取り上げる。

・3ページ（冒頭の文）

『ひろしまのピカ』は、広島に住む7歳の「みいちゃん」一家が朝食の際に原爆に遭い、逃げ惑う様子を描いた絵本である。冒頭の文は表1のように始まる。これら文章は場面設定を表しており、広島の様やかな様子が伝わってくる。

表1 冒頭（3ページ）のテキスト

（ルビは省略）

3ページ	
日本版	その朝、ひろしまの空は、からりとはれて 真夏の太陽は、ぎらぎらとてりはじめていました。 ひろしまの7つの川は、しずかにながれ、 ちんちん電車が、ゆっくりはっていました。
アメリカ版	That morning in Hiroshima the sky was blue and cloudless. The sun was shining. Streetcars had begun making rounds, picking up people who were on their way to work. Hiroshima's seven rivers flowed quietly through the city. The rays of the midsummer sun glittered on the surface of the rivers.
イギリス版	Monday 6 August 1945 Hiroshima, Japan It was almost 8.15. The People of Hiroshima woke up to a beautiful bright morning. The sky was clear and the shallow rays of early sunlight glittered through the morning air. On this summer day in wartime, work had already begun for many. The trams crossed and passed in an ordered, leisurely way. The seven rivers flowed quietly, gently southwards towards the sea.

アメリカ版は、日本版に書かれた内容をそのまま漏れなく翻訳しようとしている。一方、イギリス版は、思い切った再編（再話）をしている。日本版では「その朝」となっているところを、太字にして具体的な日付・時刻の情報を付加している。このように、読者が知らない情報を付加

したり説明したりすることは、絵本の翻訳には重要である。また、Teale 氏によると、冒頭に日付・場所を明示する文体は、ルポルタージュなど記録を目的としたテキストであるという効果を生むという。つまり同じ英語でも、アメリカ版とイギリス版では、訳者の翻訳に対する方針が異なると言える。

・4 ページ（広島の人々の暮らし）

表2は、表1に続くページ（4 ページ）で、広島の人々の暮らしを伝える部分である。紙面の都合上、アメリカ版とイギリス版は、日本版の下線部のみを引用する。

表2 4 ページのテキスト（アメリカ版とイギリス版は下線部のみ）
（ルビは省略）

4 ページ	
日本版	東京や大阪、名古屋など、たくさんの都会がつぎつぎに空襲をうけ、やけてしまいました。 ひろしまだけがいちどもやられずにいましたので、「どうしたんじゃろう」と、はなしていました。 「いまにやられるで」といって、 <u>火がもえひろがるのをふせぐために、建物をこわして</u> 道をひろくしたり、水を用意したり、にげていく場所をきめたりしていました。 みんな、どこへいくときも、 <u>防空ずきん</u> をかぶり、すこしばかりのくすりのはいったふくろをもっていました。
アメリカ版	(略) <u>To keep fire from spreading, they had torn down old buildings</u> (略) <u>air-raid hats</u> (略)
イギリス版	(略) <u>Many houses had been pulled down to make firebreaks</u> (略) <u>bokuzukin-padded cotton air raid helmets</u> (略)

ここで取り上げたいことは3点ある。1点目は、会話部分である。これは筆者自身は読み飛ばしており、話し合いでの Yokota 氏の指摘によって改めて認識したことであるが、日本版では、会話に方言が用いられ、広島に暮らす人々の素朴さを伝えている。しかしアメリカ版とイギリス版では、該当する会話はあるものの、方言は表現されていない。このように、翻訳絵本では、詳細なニュアンスを翻訳できないことがある。しかしアメリカにもイギリスにも方言はあるわけで、翻訳できないというより、方言に翻訳するという手段を選択しなかったと言える。

2点目は、日本版の下線部中の「建物」の表現である。アメリカ版では old buildings と翻訳されており、アメリカ版の読者は、古い建物を（古い建物だから）壊したという印象を持つであろう。イギリス版では Many houses となっており、都会の建物ではなく人々が住んでいる家が想像され

る。このように、翻訳者の語の選択が、読者の情景に関する想像に影響を与えることになる。

3点目は、防空ずきんである。アメリカ版では言い換えを、イギリス版ではより詳しい説明を行っている。これらもアメリカ版とイギリス版の翻訳の姿勢の違いを表したものと言える。

・40 ページ (広島と長崎の原爆投下)

表3は、40ページのテキストを比較したものである。どの版も本来は改行が多いのであるが、分かりやすくするために、また、1ページに収めるために、行を改めずに掲載している。さらに議論のために、各段落の最初の行の右端に、段落番号を付した。

表3 40ページのテキスト (段落番号は引用者による)
(ルビは省略)

	40ページ	段落
日本版	この原子爆弾でしんだのは、日本人ばかりではありませんでした。むりに日本につれてこられ、はたらかされていた朝鮮のひと、おおぜいしんだのです。そのしがいをいつまでもほうっておいたので、からすが何百羽もきてつついていた、ということです。	1
	8月6日につづいて、8月9日、長崎に、二ばんめの原子爆弾が、おとされました。	2
	おおぜいの日本人がしにました。たくさんの朝鮮のひともしにました。	3
	ひろしまでも長崎でも、原子爆弾をおとした国のアメリカ人も、なんにんかしんでいるのです。中国人もロシア人もインドネシア人も、しんでいるということです。	4
アメリカ版	That day, August 9, 1945, as Mii and her mother looked at the rubble that had been Hiroshima, an atomic bomb was dropped on Nagasaki. And there, as in Hiroshima, thousands of people died, and anyone who survived was left homeless. Among the victims, in addition to the Japanese, were people from many other countries, such as Korea, China, Russia, Indonesia, and the United States.	1
	The atomic bomb was unlike any explosive ever used before. The destruction on impact was greater than thousands of conventional bombs exploding all at once, and it also contaminated the area with radiation that caused deaths and illnesses for many years following the explosion.	2
イギリス版	It was just one atom bomb that caused this devastation. The bomb exploded in one instant but in that instant, 260,000 people died and many more were injured. And people continue to die and die because of that one atom bomb.	1
	The Japanese people were not the only ones to die. There were many Korean citizens who had been forced to work in Japan. They died, too. Their bodies were left to rot and became prey for hundreds of crows. Americans – citizens of the country that dropped the bomb – and people from China, Russia and Indonesia were also killed and injured.	2
	On 9 August 1945, the second atom bomb was dropped, this time on Nagasaki. Again, many thousands died or were wounded and the city of Nagasaki was destroyed.	3

日本版の文章は、4段落構成になっている。1段落目は前のページの続きであるから、広島のことを言っている。この1段落目で朝鮮人の強制労働について述べている。カラスがつついていたのは、広島における朝鮮人の死骸ということになる。2段落目で、長崎での原爆投下が述べられる。3段落目は2段落目を受けて、長崎において日本人と朝鮮人の死者が多かったことを述べている。4段落目は、広島も長崎も含めて、(日本人・朝鮮人以外の)他の国の死者もいたことを述べているという構成である。2段落目だけが、原爆投下についてであり、1段落目・3段落目・4段落目で死者についてであるという構成が分かりにくい。しかも、同じ死者についてであっても、1段落目が広島、3段落目が長崎、4段落目が広島・長崎であるということも分かりにくい。丸木はこの1ページの中で、様々な外国人のことに触れているのであるが、特に朝鮮人について強調している。それは、強制労働であった点、日本人とは違って朝鮮人のみの死骸が放置された点、1段落目の広島においてだけでなく、3段落目の長崎における朝鮮人についても言及している点などからうかがえる。それを裏付けるように、40ページから41ページにわたる絵には、様々な外国人ではなく朝鮮人のみの民族衣装が描かれている。この絵については研究Ⅱ(ビジュアル分析)でも触れる。また、4段落目で、様々な国が並列的にあげられているにもかかわらず、アメリカについて原爆を投下した国であることを示している点も、丸木の視野の広さや視点の鋭さがよく表れたページになっている。

次にアメリカ版について述べる。アメリカ版は、全体としては、2段落構成である。1段落目の冒頭に述べているわけであるが、長崎の名前を出してしまう。ただし、“as Mii and her mother looked at the rubble that had been Hiroshima”(みいちゃんとおかあさんが広島が廃墟になってしまったのを見たように)”という文言が加えられて、前までのつながりをつけている。朝鮮人の強制労働については触れられず、朝鮮は日本以外の国の1つとして触れられているだけである。加えて、アメリカ版は、アメリカが原爆を投下した国である点も削除している。これでは、丸木の視野の広さや視点の鋭さを反映させない翻訳になってしまっている。この翻訳絵本を読んだアメリカの子どもたちは、自国が原爆を投下した点、日本人が朝鮮人に強制労働をさせた点などについて無関心・無関係の読者反応を示さざるを得なくなる。その代わりアメリカ版では、2段落目では、原爆が何年にもわたって死亡や病気の原因になる放射線を発し続けることなど、原文にはない原爆についての情報を付加している。

さらに、イギリス版について述べる。イギリス版は、3段落構成としているが、アメリカ版とは逆に、長崎への原爆投下の情報を最終段落である3段落目に配置している。このことにより、1・2段落は、広島原爆について述べている文章となる。しかし、原文(日本版)と違うところは、1段落目で260,000人という死者の人数の情報を提供しているところだけである。2段落目では、朝鮮人の強制労働およびその死体が放置された問題を扱っている。アメリカが原爆を落とした国であることなども省略していない。以上をまとめると、アメリカ版もイギリス版も原典である日本版の文章構成を改変して、順序の入れ替えや情報の削除・付加等を行っていた。内容を分析していくと、比較的原文に忠実に翻訳しようとしていたアメリカ版の方が内容の削除が多

く、丸木の強調点を生かし切れていなかった。むしろ、ルポルタージュ風に再編しているように見えたイギリス版の方が内容については忠実であることが明らかとなった。

・44 ページ（最後の文）

日本版は、みいちゃんのおかあさんの台詞として「ピカは、ひとがおとさにゃ、おちてこん。」という言葉で終わっている。これがどう訳されているかについて述べる。アメリカ版は、“It can’t happen again,” she says, “if no one drops the bomb.”となっている。she says はみいちゃんのお母さんが言っていることを示しているのだから、ピカは人が落とさなければ落ちてこないという原文を、ほぼそのまま訳していると言える。しかし、アメリカ版では表3のように44ページの「原子爆弾をおとした国のアメリカ人も」という一節を訳していないので、この「人」がアメリカ人を指すということは、読者には伝わらない。一方イギリス版は、“Our suffering was no accident. Without your will to prevent it, it could happen again.”（「私達が被るものに偶然の事故はない。このこと（原爆落下のこと）が起こらないようにするという強い意志がなければ、このことは再び起こりうる」）という意識を行っている。丸木が用いた文を訳したのではなく、丸木がこの絵本を通じて述べようとした思想そのものを述べていると言える。イギリス版では、丸木の込めたメッセージを読者は容易に受け止めることができるであろうと Yokota 氏が推論し、Teale 氏も筆者もそれに同意した。

2.3. 結果についての考察と課題

全体として、アメリカ版の方が意図的な削除が多く、形式的には再編しているように見えるイギリス版の方が、内容について忠実であった。子どもの絵本翻訳は、原典に忠実であることだけが良い翻訳であるとは限らない。多くの論者が、絵本翻訳の複雑さを指摘している（灰島、2005 など）。子どもにとってなじみがない内容については説明を付加したり、なじみのある別の用語に置き換えたりすることで子どもの理解を得やすくするという工夫は、子どもがその本の内容を理解するという目的のためには必要不可欠である。イギリス版に比べてアメリカ版は、防空ずきの説明がなかったり、市井の人々の暮らしを伝える many houses ではなく壊してもよいと思うかもしれない old building になっていたり、朝鮮人の強制労働につれて触れられていなかったり、原爆投下がアメリカによることが書かれていなかったりした。これらを、翻訳絵本の読者反応に影響する要因として考えることができる。アメリカ版だけを読んだ子どもたちは、日本版を読んだ日本の子どもたちほどには、素朴な人々の暮らしの中でアメリカによって原爆が落とされたということを、受け止めにくくなっているのである。筆者は、『ひろしまのピカ』の翻訳によって、アメリカの子ども達にも広島の実態が理解されることを望むのだが、原典である『ひろしまのピカ』日本版ほどには、原爆投下の実態が伝わりにくくなっているのである。このように、戦争、原爆といった政治的外交的な問題に関係するような絵本が翻訳絵本という形で子どもの手に渡る場合、このようなテキストの問題が読者反応に影響すると言える。

以上、テキストの批判的ディスコース分析を行った。筆者と Yokota 氏、Teale 氏がそれぞれ

のテキスト分析を共有し話し合う過程で、さらに課題が見えてきた。Yokota氏は日本の事情についてもよく知っていたが、Teale氏は「1945年8月6日」や終戦の日である「1945年8月15日」のような日付の知識を持っていなかった。筆者は、日本で教育を受けているので、イギリス版の”Monday 6 August 1945”という日付を見るだけで、既有知識によってこれは原爆投下の話だと自分の知識を再確認するような形で『ひろしまのピカ』を読んでしまう。一方、イギリス版は、なじみのない情報を提供するという姿勢で翻訳が行われている。あまり改編が行われていないアメリカ版についても、どのような既有知識があるかということが、翻訳絵本の読者反応に影響を与えそうである。また、研究Ⅰはテキスト分析と言ってもテキスト（文字・文章）の分析であった。絵本は絵と文で成り立っているため、絵についての分析が必要である。このことを課題として、次に研究Ⅱを行うことにした。

3. 研究Ⅱ ビジュアル分析（絵の分析）

3.1. 研究方法

研究Ⅱの研究方法は、絵の分析である。絵がディスコースではない以上批判的ディスコース分析ということではできないが、絵自体は批判的に分析することができる（Kress & van Leeuwen, 1996）。具体的には、日米の教師数名を研究協力者として、それぞれ絵を分析してもらい、その絵をどのように解釈するかを語ってもらうことで、日米の教師が持っている既有知識に基づく絵本の絵の分析・解釈を明らかにすることとする。テキスト（文章）の干渉を取り除くため、テキスト部分に白いシールを貼り文字を伏せ、絵だけが見られるようになった絵本（以下、絵のみ絵本とする）を用意した。そして絵のみ絵本を1ページずつめくってもらい、そこに示された絵をどのように分析するか、その絵から何を考えるかを、自由に語ってもらう思考発話法（Think-aloud）をとることにした。頭で考えたことを口頭で報告するので、リテラシー研究の本には、Verbal reports and protocol analysis (Afflerbach, 2000) や Verbal protocols of reading (Hilden & Pressley, 2011) の名前で掲載されている方法である。データの収集は、教師が①全ページの思考発話を行う、②①で述べた内容の意図などについてインタビューに答える、③教員の経験年数や担当学年及び戦争に関する教育にどのような考えをもっているかについて述べる、の3段階で行った。1人あたり30分～1時間程度かかるものとし、日米の若手教員（20代）6名およびベテラン教員（50代）6名を目安として行うことを計画した。

日本のデータ収集は筆者が担当し、筆者が勤務している県の2つの自治体の公立小学校各1校の教師に研究協力を依頼した。結果として2009年11月から2010年11月にかけて、20代教師7名、50代教師7名のデータを収集することになった。アメリカのデータ収集はほぼ同時期にYokota氏が行い、結果5名の若手教員と6名のベテラン教員が研究協力者となった。

3.2. 結果

以下、思考発話の結果を示す。質的研究法なので厳密な数字ではないが、目安として「すべて

の」という場合には日本では14名、アメリカでは11名、「ほとんどの」という場合には日本では10名～13名、アメリカでは9名～11名、「多くは」の場合は日本では7～9名でアメリカでは6～8名、「一部の」「～もいた」という場合には1名～3名程度の研究協力者がそのように述べたことを表す。

・表紙

表紙の絵について、日本の教師は炎・戦争といったものを印象としてとらえたのに対し、アメリカの教師は、「真ん中に女の人がいる／背後の男の人は悪いことをしようとしている」といった、個々の対象に対する言及がみられた。

・1 ページ（扉絵）

原爆ドームをかたどった扉絵を見て、ほとんどの日本の教師は原爆ドームを認識し、これは広島原爆の絵本であると予想した。ある教師は、表紙の時には何の話が分からなかったので「なんだか怖い絵だと思います」と言っていたのに対し、1ページになったとたん「ああ、広島の話。」と述べ、それでこのページの意味は把握したというふうに、すぐ次のページをめくった。一方、すべてのアメリカの教師は、この建物が原爆ドームであることができず、ほとんどのアメリカの教師は、この扉絵について言及しなかった。したがって、この時点でアメリカの教師は、広島原爆について書かれている絵本であることに気付いていない。

・2 ページ（路面電車ともんぺ姿の女性や軍服姿の男性）

ほとんどの日本教師が、「戦争中で、なかなか大変な様子が分かります」などと述べ、これが戦時中であることを人物の服装から推測した。一部のアメリカの教師も、軍服については言及した。

・3 ページ（広島産業奨励館）

原爆ドームの被爆前の姿である「広島産業奨励館」が描かれているが、一部のアメリカの教師は、ヴェネツィアの風景に似ているととらえたのか、この絵本はイタリアの話であると考えた。

・5 ページ（路面電車の内部）

路面電車に乗る女性3名と少女1名男性1名の絵である。すべての日本の教師が、路面電車であることを認識した。

・7 ページ（朝食）

ある家庭における食事の場面であることを日本の教師もアメリカの教師も認識した。日本の教師は、「これは原爆が落ちる前の平和な朝ごはんの様子である」と、次の場面を予想した。しかし、アメリカの教師は、食べ物や食器についての言及が多かった。茶碗のご飯が桃色であることについて疑問を持つ日本の教師もいた。日本の教師の中には、前の路面電車に登場する人物と朝食の場面に描かれている人物を結び付けようとして、結び付けられず混乱する人もいた。

・9 ページ（原爆投下時）

日本の教師は、「ここで原爆が落ちた、ということかなと思いました。」と述べ、既存知識を利用しながら、これが原爆落下の瞬間であることに言及した。アメリカの教師においても、この時点で、原爆に思い至る者、思い至らずとも「何か悪いことがあった。爆発とか。」のように悲劇

の場面であることを予想する者がいた。

・11 ページ (みいちゃんとおかあさん)

箸をもっていることから、少女が前の場面で朝食をとっていた少女であると考える教師が両国で見られた。そこで、前のページを振り返る行動が見られた。「おとうさんはどこに行ったのかな？」など、父親の不在を疑問視する言及が両国に見られた。

・13 ページ (逃げ惑う人々)

日本の教師は、「原爆→逃げ惑う人々」という図式で、すでに頭の中にある原爆についての物語(被ばく→避難という時間計画)を再生しながら、物語を展開していた。アメリカの教師は、物語を展開するというよりは、描かれているもの一つ一つが何かを指さしながら述べるという行動がよく見られた。特に、牛、猫といった動物への言及が多かった。アメリカの教師の中には、牛からピカソの「ゲルニカ」を思い出した者もいた。

・15 ページ (おかあさんの長い手)

親子3人が避難している最中、「みいちゃんの手が、おかあさんとはなれました。」という瞬間で、おかあさんの手が異様に長く描かれている。そのことについて、「この手はなんでこんなに長いんだろ」「女の子を守ろうとしている」などの言及があった。日米ともに、この絵をどのように解釈したらよいか困惑している様子が見られた。このページでは少女が箸を持っていることについての言及もあったが、いずれにしても日米の差異はあまり見られなかった。

・18～19 ページ (動物)

人間以外にも動物・鳥・魚などが死んだり傷ついたりした様子が描かれている。特にアメリカの教師に、個々の動物に言及する様子が見られた。

・20 ページ (別のおかあさんと赤ちゃん、みいちゃん)

死んだままの赤ん坊を抱えた女の人に、みいちゃんが出会う場面である。みいちゃんのおかあさん、赤ん坊との関係などについて、混乱した日米の教師が数名いた。また、日本の教師の中には、少女の髪が白髪に見えることから、原爆のせいでは髪が白くなったとする者もいた。

・23 ページ (虹)

アメリカの教師の多くは、虹を見て「希望」「悲劇の終了」など、ポジティブな印象を持った。Yokota氏によれば、これには、旧約聖書の「ノアの箱舟」の話の影響があるのではないかという。日本の教師にも数名虹について好印象を示した者がいた。

・27 ページ (宮島)

日本の教師数名は山を前にした鳥居を見て、場面設定が「宮島口」であるとした。このページには、おかあさん・みいちゃん・おとうさんを含む計7人が横たわっている。みいちゃんは箸を持っているために分かりやすく、そのそばにいる女性がおかあさんという理解はできていた。しかし、おとうさんについては、おかあさんの帯でぐるぐる巻きにされているため、ワンピースを着た女の人にも見えてしまう。そこで、「おとうさんははぐれていなくなった」とする被験者もいた。この「はぐれた」という解釈は、既存の原爆の物語(原爆後には川に飛び込んだ人が多く、

その混乱の中で親しい人とはぐれた人もいたこと)に関連させる形で行われたと推定される。

・28～29 ページ (夜空)

星空を花火だとするアメリカの教師がいた。伏せてあるテキストは、「日がくれました。夜がきました。夜がきました。朝がきました。また夜がきて、また太陽がのぼり、夜がきて、朝がきました」である。インタビューでは、「この絵本では、何日ぐらいの日数が経ったと思いますか。」という質問をした。28 ページは、絵だけ見るとテキストのように数日間の経過を表すとは考えにくい。しかし、日本の教師の中には、何日間かの経過を想像した者もいた。

・31 ページ (元気な人と、倒れた人々)

日米の教師とも、元気な人が、被ばくした人たちを助けているととらえていた。

・33 ページ (おにぎりを与えるおばあさん)

日本の教師は、おばあさんが持っている物がおにぎりであることが認識できたが、アメリカの教師はほとんど認識できなかった。日本の教師は、「おばあさんはもう元気がなくて食べられないが、この子は食べられるだろうと思って、おにぎりをあげている」と考えた。少女は箸をにぎっていて手足が長く描かれており、年数が経過し成長したと混乱するアメリカの教師もいた。

・35 ページ (箸を離したみいちゃん)

日本の教師だけでなく、アメリカの教師も、箸を離すことができた少女について、言及した。

・38～39 ページ (焼け野原)

焼け野原が描かれているが、転がっているおかまなどから、これが登場人物の家があった場所であるとした被験者が日米ともに多かった。

・40～41 ページ (朝鮮民族衣装)

研究 I で述べた、強制労働をさせられた朝鮮人も外国人も被害にあったことを述べている場面である。絵としては、朝鮮人の民族衣装が空を舞っている様子が描かれている。日本の 50 代の教師数名は、この絵を見て「朝鮮人の強制労働」について言及した。ほとんどの日本の教師はこれが朝鮮人の衣装であるとしたが、若手教員の中に一部「もう自分は死んでしまうのだけど、魂がきれいなドレスをまた着たいなあと…」ときれいなドレスと考える人もいた。一方アメリカの教師は、これらは日本の民族衣装(着物)であるととらえていた。

・43 ページ (ガラスのかけらを取り除く)

原爆投下時に頭に突き刺さったガラスのかけらを抜いているところである。両国の教師にとって、この場面は分かりにくいものであり、特に、ガラスのかけらが光っているところから、「あかりがついてる」などと言及する者がいた。セーラー服を着ているみいちゃんを見て、年数の経過を述べる教師は、日本に多かった。アメリカの教師の中には耳かきをしているとする者もいた。

・44 ページ (灯籠流し)

日本の教師のほとんどは、これが灯籠流しの場面であること、原爆からかなり時間(年数)が経過して平和な時代になったことを述べた。一方、灯籠流しについて知識はなくとも、「メキシコの伝統行事みたいなお祭り」とするアメリカの教師もいた。

・この絵本について

最後に、この絵本についてのインタビューを行った。ある日本の女性教師は、写実的あるいは緻密に描かれているのではないこの絵本の絵について、「原爆のことだからこの絵なのだと思います。……原爆の悲惨さは、子どもたちに伝わりますね。あまりひどくはなく、しかし悲惨さは伝わるいい絵だと思います。」とした。そして、日本の教師のうちベテラン教師は平和教育として「これらの絵本に描かれていることを子どもに伝えていかなければならない」としたが、若手教員は「自分たちも戦争についてよく知らない。まして子どもはもっと知らない。教えていくのは難しい」としていた。この絵本を子どもと読むのであれば、6年の社会科の時間か、5年生の国語（いわゆる平和教材）の学習時に、関連する本として紹介したいという考え方が多かった。アメリカの教師は、「広島」と聞けば原爆のことを連想するという教師が多く、千羽鶴を折って12歳で亡くなったサダコの話を知っているという教師もいた。平和教育を行うことは重要であると考えているが、その内容は広島や原爆のことではないとのことである。

3.3. 結果についての考察

日本の教師とアメリカの教師の読者反応で最も顕著な相違点が出たのは、原爆ドームの扉絵の部分であった。ここで日本の教師はこれが「広島原爆に関する本」とであると予想する。するとスイッチが入ったように、「原爆に関する既存知識」に乗せる形で、この絵本を理解しようとする。すなわち、既存の物語の枠組みに、見えるものを合わせていく形で、物語の流れを作り出そうとした。これに対し、アメリカの教師は、既存の物語や知識がないもしくは少ないので、目に見える絵が何か、個々に言及するという傾向があった。このことは、同じ絵であったとしても、翻訳絵本では、読み手の既有知識によって、表すものが様々に変化する選択されるということを示している。したがって、最初は予備知識のない状態で絵本の絵を見ていても、知っている事物を認識した時、その事物についての知識によって、読者反応の方向性は変わってくるということである。日本の教師は、たとえこの『ひろしまのピカ』という絵本を知らなくても、丸木らの「原爆の図」など、原爆の絵について一定のイメージを持っている。『ひろしまのピカ』の絵についても、原爆に関する既存知識の枠組みで理解しようとしている。しかし、アメリカの教師は、詳細に個々の事物を報告し、その結びつきについては「分からない」とすることが多かった。

しかし、当初予測した以上に、共通点も見ることができた。例えば、23ページでは、悲惨な状況が続いた後に、人々が希望を見出すものとして「虹」が描かれているのだということを、日米両方の教師が解釈した。登場人物が物語中で遭遇している心情や、それを読み取ろうとしている読者の心の動きにも、共通点があるということである。44ページについても、灯籠流しという日本の行事について知識がなかったアメリカの教師も、メキシコの祭りを引き合いに出しながら鎮魂の意味合いを視覚的に感じていた。これらのことは、翻訳絵本の絵を通して、共通の心情が伝わっているとみることができる。丸木の絵は写実的一辺倒ではなく、象徴的に描かれている

部分もある。14ページのテキスト「みいちゃんの手が、おかあさんとはなれました。」に合わせて15ページに描かれている絵は、おかあさんの腕が極端に長く、日米両方の教師がこの絵をうまく理解できなかった。象徴的な絵を解釈するのは、難しかったと言える。しかし、丸木の絵は象徴的な絵だからこそ、前述のように「あまりひどくはなく、しかし悲惨さは伝わるいい絵だと思います。」という評価を下す教師もいるのであろう。冒頭に鳥越（2002）を引用したように、戦争を伝える絵本の絵については賛否両論があるだろうが、丸木の場合は象徴的な絵という方法を用いたと言える。

戦争児童文学研究の第一人者である長谷川潮（2017）は、戦争児童文学には、戦争について知らせるという情報源としての役割と、作家の精神活動としての文学表現であるという2面性が備わっているという。本研究は、その2面のうち、どのような情報が翻訳を通してどのように伝わるのかということに焦点を当てた研究であった。文学表現という面については、象徴的な絵であるという指摘に留まったと考えている。絵本という媒体を踏まえた文学表現についても、さらにとらえていく必要がある。

戦争のようなテーマを抱えた絵本の読書に教師が与える影響は大きい。どのような知識をどのような文脈で与えるかが、子どもの読者反応に影響していくことになる。今回のビジュアル分析では、日米それぞれの国の間での世代間格差も若干見ることができた。どのような考え方を持った教師が子どもに絵本を紹介することになるのか、その子どもはどんな読者反応を持つことになるのか、今後も検討する必要がある。

4. おわりに

以上、本研究では、『ひろしまのピカ』を取り上げ、文（テキスト）と絵（ビジュアル）に分けて、翻訳絵本がどのように原文と異なるか、原作と同じ絵も読む人の既有知識・文化背景によってどのように読むものが異なるのかを、検討してきた。その結果、文の比較では、必ずしも日本語・英語といった言語の違いだけが読者反応に影響を与える要因ではなく、翻訳者の翻訳方針や文の構成の仕方、選択された語などで、読者の反応の違いが変わってくる可能性が示唆された。また、ビジュアル分析では、絵自体には違いはなくても、読み手自身の既有知識や子どもにその絵本に出会わせる大人の考え方で、やはり子どもがとらえる内容や示す反応が影響を受けることが示唆された。さらに、同じ文化内にいる同じ国の教師であっても、年齢などによって受け止め方に違いがあることも予測され、単に言語や文化の違いというだけでなく、翻訳者や教師の反応などが、翻訳絵本の子ども読者反応に影響を与えることが分かった。

しかし、単に既有知識が少なければ、十分に翻訳絵本を読むことができないなどと安易に結論づけることは避けたい。奥山（2007）や目黒（2007）が指摘したように筆者自身も被害者意識が既存する児童文学や、被害者の立場のみが描かれた戦争児童文学教材が掲載されてきた日本の国語教科書で、第二次世界大戦や原爆のことばかりに偏った知識を得てきたからである。アメリカの教師が述べた平和教育と筆者が受けてきた平和教育は違うものであった。その文脈を可視化

するものとして、戦争の翻訳絵本を読むことに意味を見出したい。一方で共通点もあった。日米両方の教師が、悲惨な状況の後に出てきた「虹」に希望を見出したり、灯籠流しの場면을鎮魂の祭りとしたりしたことである。既有知識は異なっても、同じ絵の内容が共通の読者反応を引き起こしたと言える。

今回は、日本が原作の絵本での比較を行った。翻訳絵本は、日本語から英語へ翻訳される場合に、日本語と英語という言葉の違いだけでなく、アメリカ及びイギリスが抱えている原爆に対する背景や既有知識の違い、翻訳者の翻訳方針・態度の違い、子どもがその絵本に出会うまでにかかわる大人（教師など）の違いによって、様々に影響を受けることが推測できる結果となった。

今後の課題としては、2点ある。1点目は『ひろしまのピカ』の日米双方の子どもの読者反応のデータを取り、今回の研究結果との突き合わせを行い、子どもが翻訳絵本をどのように読むのかについて理解を深めたい。もう1点は、別の絵本での研究である。さらに、今度は外国語から日本語へ翻訳されている戦争に関する翻訳絵本について、考察を深めていきたい。

注・謝辞

本稿は、Junko Yokota 氏、William Teale 氏と継続して行ってきた翻訳絵本の一連の研究のうち『ひろしまのピカ』についての複数の学会発表を、両氏に許可を得た上で、さらに日本における学会発表を経て、筆者の責任でまとめたものである。Yokota 氏、Teale 氏、研究Ⅱにご協力くださった日米の教師の皆様に感謝を申し上げます。

文献

足立幸子（2013）翻訳絵本の読者反応を規定する前提要因 — 『ひろしまのピカ』の日米比較研究— 日本読書学会第 57 回研究大会、林野会館、『日本読書学会第 57 回研究大会発表資料集』pp.151-160.

足立幸子（2020）「翻訳絵本の読者反応に影響する前提的要因—友達の本の日米比較研究—」『新大言語』41, 18-29.

Afflerbach, P. (2000). Verbal reports and protocol analysis. In Michael L. Kamil, Peter B. Mosenthal, P. David Pearson, and Rebecca Barr. *Handbook of Reading Research Volume III* (pp.163-179). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Apol, L., Sakuma, A., Reynolds, T. M. & Rop, S. K. (2002). "When can we make paper cranes?": Examining pre-service teachers' resistance to critical readings of historical fiction. *Journal of Literacy Research*, 34(4), 429-464.

ビーチ, リチャード, 山元隆春訳 (1998)『教師のための読者反応理論入門—読むことの学習を活性化するために—』溪水社

Fairclough, N. (1995). Critical discourse analysis: *The critical study of language*. London: Longman.

Gee, J., P. (2000). Discourse and sociocultural studies in reading. In Michael L. Kamil, Peter B.

- Mosenthal, P. David Pearson, and Rebecca Barr. *Handbook of Reading Research Volume III* (pp.195-207). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Goldman, S., R. & Wiley, J. (2011). Discourse analysis: Written text. In Nell K. Duke and Marla H. Mallette (eds.) *Literacy Research Methodologies 2 nd Ed* (pp.104-134). New York: The Guilford Press.
- Hilden, K., & Pressley, M. (2011). Verbal protocols of reading. In Nell K. Duke and Marla H. Mallette (eds.) *Literacy Research Methodologies 2 nd Ed* (pp.427-440). New York: The Guilford Press.
- 灰島かり (2005)『絵本翻訳教室へようこそ』研究社
- 長谷川潮 (2017)「戦争児童文学研究に向けて」『児童文学研究』50, 17-24.
- イーザー, ウォルフガング, 響田収訳 (1982)『行為としての読書—美的作用の理論—』岩波書店
- 上谷順三郎 (1997)『読者論で国語の授業を見直す』明治図書
- Kress, G., & van Leeuwen, T. (1996). *Reading images: The grammar of visual design*. London: Routledge.
- 丸木俊 (1980)『ひろしまのピカ』小峰書店
- Maruki, T. (1982). *Hiroshima no pika*. New York: Lothrop, Lee & Shepard.
- Maruki, T. Elkin, J. (1982). *The Hiroshima story*. London: Adam and Charles Black.
- 目黒強 (2007)「小学校国語教科書における戦争児童文学教材をめぐるイデオロギーの検討」『児童文学研究』40, 36-38.
- 三宅興子 (2019)『三宅興子〈子どもの本〉の研究2—イギリスの絵本の歴史—』翰林書房
- 守屋慶子 (1994)『子どもとファンタジー—絵本による子どもの「自己」の発見—』新曜社
- 中西満貴典 (2008)「批判的ディスコース分析における『言説と主体』の位相」『時事英語学』47, 1-9.
- 糠屋美千子 (2011)「クリティカル・ディスコース・アナリシス (CDA) の言語・コミュニケーション教育における実践—環境コミュニケーションの授業活動を例として—」『社会言語科学』13 (2), 116-127.
- 奥山恵 (2007)「戦争を描く方法を読み直す—子どもに向けて国と地域を物語る意味—」『児童文学研究』40, 32-35.
- Osada, Y. (2018). The contents of a grade 3 national language textbook of Myanmar: Contents analysis of 2018 textbook. *Journal of Language Teaching* 45, 61-65.
- 小柳和喜雄 (2005)「メディア・ディスコースの分析方法に関する予備的研究—Norman Fairclough のクリティカル・ディスコース分析を中止に—」『教育実践総合センター研究紀要』14, 83-91.
- 佐野洋子 (1977)『100万回生きたねこ』講談社
- 田中智生, 小川孝司監修, 岡山・小学校の国語を語る会編 (2012)『読む力が育つ「おもしろ見

つけ」—読者反応理論を取り入れた物語の授業—』三省堂

鳥越信（2002）『はじめて学ぶ日本の歴史Ⅲ—戦後絵本の歩みと展望—』ミネルヴァ書房

渡辺茂男，大友康夫（1985）『おふろだ，おふろだ！』福音館書店

Yokota, J., Jorenby, M., Adachi, S. & Teale, W. H. (2007). One Japanese original text, multiple English versions: Critical discourse analysis of Hiroshima No Pika and differences in impact on reader response. Paper presented at the 18th Biennial Congress of the International Research Society for Children's Literature, Kyoto, Japan.

Yokota, J., and Adachi, S. (2010) The Impact of Translated Texts of Picture Books on Reader Response. Paper presented in the 32nd IBBY International Congress Santiago de Compostela, Spain.

Yokota, J., Adachi, S., Teale, W. H. (2010) Japanese and American educators on Hiroshima no pika. Paper presented in National Reading Conference/ Literacy Research Association 60th Annual Meeting, Fort Worth, Texas, U.S.A.

(新潟大学)